

ドミニカ共和国の日系人社会に見る居住環境の持続性と民族的帰属意識

THE SUSTAINABILITY OF RESIDENTIAL ENVIRONMENTS AND THE SENSE OF ETHNIC BELONGING WITHIN SOCIAL GROUPS OF JAPANESE DESCENT IN THE DOMINICAN REPUBLIC

長野 真紀 芸術工学部環境デザイン学科 助教
今村 文彦 基礎教育センター 教授

Maki NAGANO Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
Fumihiko IMAMURA Center for Liberal Arts, Professor

要旨

1950年代に南米ドミニカ共和国に移住した日本人移民を対象に、生活学と文化人類学の視点から、居住環境の持続性と民族固有の文化的アイデンティティの保持・継承について明らかにすることを目的とする。

ドミニカ共和国へ入植後、現在まで全移民の約1/5にあたる家族が残留して生活を営んでいる。彼らの定住化を支えた要因の一つには、ドミニカ社会との相互交渉の中で日本人としての生活、行動、文化を強く規定してきた民族的な生活思考がある。それは、日系人社会においてどのような機能を果たし、表現され、受け継がれてきたのか、移民集落の中で育まれてきた生活文化継承の実態把握と約60年にわたる生活の記憶、移民母村となる日本での暮らしの記憶を辿りながら、日本人の生活文化と、その背後にある暮らし方の原理を探る。

移住の経緯、入植地の環境、生活習慣、住まいの形態、移民母村について調査・分析し、一時的な居住目的とは異なる、現地に定住することを決意した海外移民の暮らし方を読み解き、民族的文化と移住先の文化を互いに補完し合う地域や暮らしの特性を捉え直した。

なお、本研究では在ドミニカ共和国日本国大使館を通じて、各コロニア（集落）に居住する日本人と連絡調整を行い、研究を展開することができた。

Summary

This study examines the sustainability of the residential environment, the degree of inheritance of a specific ethnic cultural identity, and the retention of this distinctiveness among the Japanese people who migrated to the Dominican Republic in the 1950s. Detailed investigations were conducted into their way of life in the Caribbean nation from the perspective of cultural anthropology.

At present, approximately one-fifth of these immigrant families remain intact after settling in the Dominican Republic. The success of the settlement was partly owing to their adherence to their often strict ethnic Japanese customs and moral codes in their daily activities and in their interactions and negotiations with the broader Dominican society. To identify the role that their ethnic identity played and the manner in which it has been expressed in the communities in question, we explore the present realities of these living cultures, as well as their memories of the past 60 years, from their life in Japan to the formation of their new communities abroad.

1. 研究の目的

本研究は、1950年代にドミニカ共和国に移住した日本人移民を対象に、居住文化・居住環境の異なる地で現在までどのように生活を営み、文化的アイデンティティを保持してきたのか、入植者1・2世の生活史と個人史を辿りながら、住まい・環境：生活学、地域社会・生活習慣：文化人類学の視点を通して、民族的帰属意識を明らかにすることを目的とする。移住文化の視点から集住環境を捉え直し、地域固有の問題を解決するための評価手法や民族固有の暮らし方の原理を解明し、周辺環境に適応しながら長く安定して住み続ける生活のデザイン手法を探る基礎研究と位置付ける。

2. 研究の学術的背景

近年、世界中で人口の移動が行われている。短期、長期、永住、非永住を問わず、国境を越えて移動が活発化する中で、日本社会においても多文化共生の考え方が根付き始めている。越境移動によって住み慣れた土地を離れた人々は、移住先の新しい環境・社会の中で、これまでの経験を活かしながら新しい生活を始めるが、そこでは、民族や地域に伝わる伝統的な生活様式を変容させながら当地の環境に適応していくこととなる。文化的背景の異なる地へ移った際に、何を指標としながら生活文化を構築し、どのように環境・空間を読み解いたのか、異なる文化圏における居住生活の実態とその歴史的経緯を探求することで、海外移民が住文化に求めた民族的帰属意識が明らかになるのではないかと考えるに至った。

3. 研究の方法

ドミニカ共和国に入植した日本人移民は、政府が計画的に用意した8地域に分散してコロニア(集落・国営移住地)を形成していたが、塩害や水不足、急峻な山地などの厳しい環境条件と土地所有権問題により過酷な生活を強いられ、国内外への再移住・転住を余儀なくされた。本研究では、移住当初のコロニアのうち、数十世帯規模で生活環境が持続している①ハラバコア_Jarabacoa、②コンスタンサ_Constanza、③ダハボン_Dajabon、の3地域に

対象を絞り、現地調査、文献調査、地図分析を主軸に研究を進めた。現地では移民1・2世の聞き取りを中心に、立地環境、住居プラン、生活習慣、地域行事、移住の経緯と移民母村の環境について調査を行い、移住当時から現在までの生活の変遷を辿り、当時の移住資料から各世帯の家族構成や生業についても分析を進めた。なお、聞き取り調査では、多くの日本人が転住した首都サント・ドミンゴ周辺に居住する世帯も対象とした(図1)。

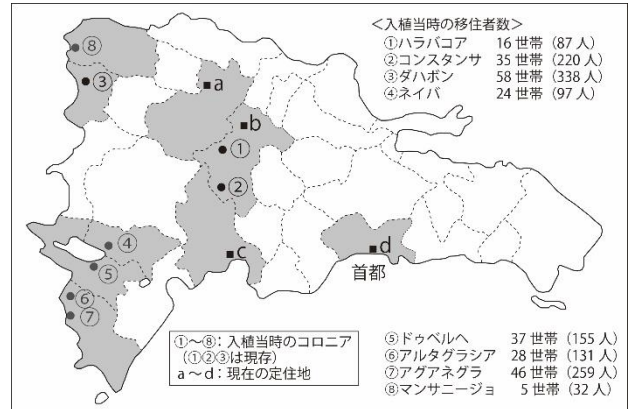


図1. ドミニカ共和国における日本人コロニア分布図

4. コロニアの立地環境

カリブ海に浮かぶドミニカ共和国は、隣国ハイチ共和国とイスパニョーラ島を二分する島国である。国土面積は約48,000km²、国土の中央部にはドゥアルテ山脈を中心に、3,000m級の高山を擁する中央山脈が東西に走る。各山脈からは海や湖に流れる多数の河川があるが、治水整備が不十分で洪水の被害が多い環境下にある。熱帯サバナ気候に属するが気候の地域差が大きく、標高と海岸からの距離によって高山性と海洋性に分かれ、高山性の地域では冬場の気温が氷点下を記録することもある¹⁾。

本研究では、米国テキサス大学が所蔵する1/50,000の地形図(全121枚、1984～1988年作製)を入手し、日本人が入植した8地域の地形模型を作成し、空間・環境分析を進めた(写真1)。①ハラバコアは標高600m、②コンスタンサは標高1,500mの山腹に位置し、両コロニアとも際立った凹凸地形を持たない平坦地に分布し、現在まで生活環境が持続している。周囲を山々に囲まれた安定した立地条件を持ち、他のコロニアと比べると比較的水源も豊かであるが、耕作地に適さない土壌であった。③ダ

ハボンはハイチ共和国との国境に面した中央山脈の北麓、標高 40m の平坦地に位置し、付近には川が流れるが、入植当時は水源の枯渇により生活・農業用水の確保に困難を伴った。その他の 5 地域 (マンサニージョ、アグアネグラ、アルタグラシア、ドゥベルヘ、ネイバ) は国境付近の急峻な山間に位置し、塩を含んだ土地と水不足により農地の開墾に苦勞し、居住環境を発展させることができなかった²⁾。マンサニージョは唯一の漁村集落で海に面した海拔 10m に位置するが、漁獲量が少なく漁業を確立することができなかったため、衰退した地域である。



写真 1. 1 : 5,000 地形模型 (ハラバコア)

5. 移住の経緯と入植地

日本政府の募集要綱に基づきドミニカ共和国への移住者が募集され、提示条件を満たした家族が全国から応募した。その中から 249 家族・1,319 名が選ばれ³⁾、1956 年 7 月から 1959 年 9 月までの 3 年間に計 13 回にわたり入植した。日本では戦後の引揚者による人口増加と食糧不足、農地不足、就業率低下により、海外への移住を奨励していた。一方ドミニカ共和国では、農業開発計画の遂行・促進、農業知識と技術の向上、生活水準の引き上げを目的に移民の受け入れを積極的に行い、スペイン、ポルトガルや、難民救済法によりハンガリーからも多くの移民を受け入れていた。外国人計画移住は 1937 年から始まり、19 年後に日本から初めての農業移民が当地を踏んだ。

当時、ドミニカ国内の農業コロニアは全 62 箇所あり、そのうちの 12 箇所が外国移民向けのコロニアであった。現地環境は募集要項に記されていた内容と大きく隔たりがあり、無償提供される予定であった農地は殆ど用意されておらず、就業条件も雇用労働者と同じであった。携

行品として用意した資金や食料、各種の備蓄材は早々に底をつき、現地での生活は困難を極め、環境の良いコロニアを求めて多くの世帯が国内転住を繰り返した。その結果、1963 年までに 133 家族 611 人が帰国、70 家族 376 人がブラジル、パラグアイなどの南米へ転住、45 家族 230 人が残留⁴⁾した。現在、移住者 1 世の高齢化が進み、世代交代が進んでいる。残留することを選択し、異国の地で根を張り続けた彼らと子世代の 2 世を中心に、14 世帯・20 名へヒアリングを行い、入植当時に生活していた住居の実測や日本の移民母村の環境についても調査を進めた。

・ハラバコアおよびコンスタンサ

国土の中央、内陸部の高原地帯に位置し、蔬菜栽培に適した環境で、日中は 30 度前後まで上がるが、朝夕は涼しく、冬季には 10 度以下になる。電力が豊富な地帯で移住当初から各戸には水道も設置され、農業用水の不足はなかったが、ハラバコアでは 5 月の雨季に多量の降雨により耕地が氾濫することもあった。コロニア周辺には、スペイン、ハンガリー、ドミニカ人が居住していた (写真 2)。



写真 2. コロニアの耕地全景 (コンスタンサ)

・ダハボン

ハイチ共和国との国境付近に立地するため、国土防衛の役割を担い、重要拠点として位置づけられていた。一部小丘を除き平坦地形で、年間を通して 23 度以上の熱帯気候である。日本からの初めての入植地でもあり多くの日本人が暮らしていたが、少雨量で灌漑用水が不足し、耕地には石礫が多く、農作物の植え付けまでに長い年月を必要としたため、他のコロニアに転住した世帯も多かった。

6. 居住環境と生活習慣

日本人コロニアに用意された住居は木造・スレート葺

で、原色ペンキ塗りの派手やかな建物であった。数 m 間隔で並列配置した住居には、生活に必要最低限の机・椅子・寝台などの什器と、鍋・七輪などの調理道具が用意されていた。床は居室が板の間、調理場がセメントで、窓はガラス戸のない木製ルーバーだったため、住居内部は非常に暗かった。居室が 3 間と家族共有の作業・多目的空間が 1 間、調理場、少し離れた場所に便所があり⁵⁾、日本から持参した五右衛門風呂や桶を設置して入浴できる空間を造っていた。住居の間取りはコロニアごとに多少の差異が見られたが、基本的な空間配置や空間利用は同じであった。セルフビルドの住居では、入植時に居住していた空間構成を基礎として、家族の増加や資金状況に合わせて寝室や食堂に増築の跡が見られた(図 2)(写真 3)。当時の日本人専用住居は各コロニアに数軒単位で現存しているが、ドミニカ人の住居は木造・トタン葺もしくは草葺であったため、経年劣化によりすべて消滅している。

日本と自然環境が異なり、入手できる建材にも制限があったため、新しく家を建てる際に日本式の居住空間を再現しようとした世帯はなかった。しかし、入植当時は住居内を上足とする家が多く、一部では現在でも特定の居室を土足禁止にして床の上にマットを敷いて寝る習慣や

入浴時に浴槽に浸かる習慣が残っている。現在の住居はドミニカ様式であるが、室内の掛け軸、置物、什器などに日本のものを多用している例が多く、居室には仏壇を祀り、日本式の細く短い線香を供えている。また、民間互助組織である頼母子講が継承されていたコロニアもあり、婦人会によって組織運営が行われていた。

日本の慣習は食生活にも色濃く反映されており、入植当時は米、芋、とうもろこしを主食としていたが、日常的に味噌や豆腐を作って食べていた。現在は肉・野菜の煮込み、わかめ、酢の物、梅干し、漬物などの日本食も常食しており、地域行事の際には餅、寿司、天ぷら、赤飯、正月には雑煮を食べる(写真 4)。鏡餅やお年玉も継承されており、盆踊り、敬老会、餅つき、慰霊祭、日本語発表会などの行事が日系コミュニティで行われている。

入植時に配分された農地は当時の政権が崩壊後、元の地主からの返還要求が相次ぎ、現地住民との難しい調整



写真 3. 入植当時の住居 B (左)、セルフビルドの住居 C (右)



図 2. 日本人住居平面図

が続いている。そのため、住まいの場所を自らの意思で選定することは難しく、コロニアの中で住居を再建する例や、仕事を通じて知り合ったドミニカ人から空いている土地を譲渡してもらった例が多かった。気候・風土を民族固有の暮らし方や居住空間に反映させることが容易ではなかった環境下において、日常の生活習慣や地域慣習に日本式の営みが継承されている。



写真4. ハレの日本食(左)、ケの日本食(右)

7. 移民母村

1956年の移住初年度は鹿児島、高知、宮崎、熊本、山口、福島、北海道の7地域に募集が限定されていたが、その後、日本全国から受け入れが行われた。32都道府県からドミニカへ移住したが⁶⁾、移住から25年後の1981年に作成された移住者名簿⁷⁾を基にドミニカ共和国に定住した162世帯の出身地を分類すると、19都道府県であった。まとまった農地が少なく1戸あたりの耕作面積が極端に少なかった鹿児島県の出身者が最も多く、定住した全移民の約1/4を占めていた(表1)。人口の多い鹿児島県、高知県出身者は年に一度、県人会を開催し、入植から62年経った現在も同郷者との親交を深めている。

移民1・2世の14名、68~90歳を対象に、移民母村の居住環境についてヒアリングを行った。出身地は鹿児島県6名(霧島市、阿久根、串木野市、曾於市、南さつま市、川辺郡)、山口県2名(山口市、岩国市)、熊本県2名(合志市、菊池郡)、高知県1名(土佐市)、徳島県1名(日和佐市)、山形県1名(新庄市)、福島県1名(相馬市)である。具体的な居住地の環境、住居形態、戸数、住居形式、地域行事、生業に関して、個々の記憶を辿りながら当地の具体的生活と環境について調査した。当時の住宅の間取りと家族構成、住居と生業との関わりについて記憶している人が多く、現地の生活に移民母村での住まい方を継承している例はなかった。一方で、出身地にか

かわらず、習慣などを含めた住・食に関する共通の生活様式を継承しており、これは日本人コロニアで集団生活を営んできた結果だと考える。また、入植前に中国・朝鮮などの海外暮らしを経験していた世帯もあり、農業経験者だけでなく、多様な職業経験から生活の知恵を出し合っ

て暮らしを立てていた様子が窺えた。定住後は兼業農家も多く、食品雑貨商、機械修理、美容師、運転手、飲食店、医師など20数種の職種に就いている。

山口	高知	群馬	静岡	広島
14世帯	23世帯	1世帯	1世帯	7世帯
鹿児島	福島	島根	秋田	熊本
45世帯	20世帯	1世帯	1世帯	16世帯
北海道	福岡	山形	千葉	徳島
9世帯	8世帯	3世帯	1世帯	2世帯
神奈川	愛媛	福井	東京	不明
1世帯	2世帯	2世帯	1世帯	4世帯

表1. 1981年の在留者世帯出身地一覧

8. まとめ

本研究では、入植地の概要と歴史的経緯、居住環境、生活習慣について、現地調査を軸に展開してきた。移民1・2世の高齢化が進む中、当時の具体的生活や社会環境、居住形態に関する調査は、多文化共生の視点からもその重要性が増している。今後、本研究を継続しながら民族の越境移動がもたらす地域的・社会的な課題を捉えていくための研究基盤を構築していきたいと考えている。

(本文に掲載されている図版・写真はすべて筆者作成)

参考文献

- 1) 国本伊代編著、『ドミニカ共和国を知るための60章』、明石書店、2013、pp.14-21
- 2) ドミニカ共和国日本人農業移住50年記念誌編纂委員会編、『青雲の翔』、ドミニカ日本人移住50周年記念祭執行委員会記念誌編纂委員会、2009、pp.85-92
- 3) 国際協力事業団、『ドミニカ共和国日系人実態調査報告書』、1986、p.1
- 4) 国際協力事業団、前掲書、p.1
- 5) 日本海外協会連合会、『移住地資料』、1959、pp.196-216
- 6) 国際協力事業団、『海外移住統計 昭和27年度～平成5年度』、1994、p.36
- 7) ドミニカ日本人連合会二十五周年記念行事執行委員会編、『カリブの島の拓人たち ドミニカ移住25周年記念史』、ドミニカ日本人連合会二十五周年記念行事執行委員会、1981、pp.116-141